

提出日:2013 年(平成 25) 9 月 30 日

阿武川源流ワーク&スタディキャンプ事務局  
代表 伊藤丈二

申請事業名:

第 4 回 阿武川源流ワーク&スタディキャンプ

(コア=日本・共も生き・NICE 合宿①2012 夏)

テーマ:韓国と日本の若者が、川上すぎのこ村に、小さな陶芸窯をつくり  
子どもたちの「萩焼体験国際キャンプ」(仮称)に備える

1、はじめに(申請団体の設立目的、活動の背景、今後の方向性、「川上すぎのこ村」について)

阿武川の源流域も例外ではなく少子高齢化が進み、過疎地域として空き家や休耕地が目立ってきている。この地域に国内外の元気な若者が入り、短期間ではあっても公共的な場で汗を流し、地域住民らと交えた異世代・異文化交流を通じて、誰でもが穏やかに共に生きていける地域づくりに寄与することを目的に設立したキャンプ事務局である。

当面の主な舞台となる川上すぎのこ村(旧川上村立野戸呂小・中学校跡)は、特定非営利活動法人すぎのこジャンボリー委員会が管理していることにはなっているものの、ここ数年は利用されておらず、法人も休眠状態となっている。当キャンプ事務局の代表が同委員会の代表理事を昨年を引き継いでおり、来年の夏までに同委員会の理事会を再構成して法人運営を正常化し、同委員会による川上すぎのこ村の管理運営を軌道に乗せる予定。当キャンプは、地域とのネットワークづくりも意識しており、そのネットワークが川上すぎのこ村を長期的に支える母体になることも願っている。

なお、今後もキャンプの主会場は川上すぎのこ村となるが、近隣の廃校跡やあまり利用されなくなった公共的施設や空き民家、休耕地などの所有者らと連携しながらキャンプを組み立てていく予定。

「川上すぎのこ村」について:

旧川上村立野戸呂小・中学校。1875(明治 8)年、「野戸呂支校」として開校。1978(昭和 53)年に小学校としての 103 年の歴史を閉じる。同時期に中学校も 30 年の歴史を閉じる。その後、1983(昭和 58)年に当時の川上村社会福祉協議会が事務局となり県内の福祉関係団体と連携して「子どもジャンボリー」(子ども交流キャンプ)を開催。「障害者野外活動センター 川上すぎのこ村」と命名し、再利用が始まる。2002(平成 14)年には「特定非営利活動法人すぎのこジャンボリー委員会」が川上村社会福祉協議会から事務局を引き継ぎ現在に至っている。

川上すぎのこ村はノーマライゼーションの理念普及を目的としており、自然の中で人間だけでなく、そこに住む他の生き物たちとも仲良く共存できる場となることも願っている。萩市健康福祉計画の基本理念にもノーマライゼーションを置いており、「高齢者や障害者など、社会的に不利を負う人々を当然に包含するのが通常の世界であり、そのあるがままの姿で他の人々と同等の権利を享受できるようにし、ともに社会の一員として生活し、活動する地域社会づくりを進める考え方。」と定義している。当キャンプのプログラム構築においても、ノーマライゼーションを基本に置いている。

## 2、第4回阿武川源流ワーク&スタディキャンプの目的及び申請動機

阿武川源流域の殆どは、平成の大合併以前は「阿武郡」であり、少子高齢化が進み空き家や休耕地が目立っている。合併により小中学校の統廃合も進んでおり、益々地方の中核都市(旧萩市や旧山口市など)の市街地への子育て世代の移住が進んでいる。

当キャンプ事務局の代表は同じ旧阿武郡内で隣村であった旧旭村の出身であり、5年前にUターンするまでの17年間、海外での教育支援や文化活動に取り組んでいるNGO・シャンティ国際ボランティア会の職員として在籍した。タイ・カンボジア・ラオス・アフガニスタンなどでの事業に携わった経験などを通じ、日本が近い将来、食糧やエネルギーの調達が深刻な問題になる可能性が強いことを確信した。と同時に、海外で学校建設支援をする一方で日本の山間地域では廃校・休校が進み、その多くが放置されていることに違和感を持っている。

先人が長い年月と大変な労力を注ぎ込んで源流域の谷間に棚田を築いて食料を生産し、炭焼きなどで里山を守りながらエネルギー源を供給してきた歴史がある一方で、「口減らし」のため旧満州や南米への移民として追い出した歴史もある。過去の戦争も現代の戦争(紛争)も、食料やエネルギー問題が深く関わっている。

キャンプでは、これらの歴史を学ぶと共に、103年の歴史を持ち34年前に廃校となった小学校の再生・活用を若い力のボランティアでお手伝いする。キャンプ中に萩焼体験用の小さな陶芸窯を製作する。萩焼きのルーツは韓国にある。キャンプには韓国からの青年をはじめ、在日留学生なども加わる。参加者には異文化交流のみならず、地域の高齢者らとの交流も織り込んでおり、異世代交流の場にもする。

キャンプ参加者が源流域に立って日本の現実と日韓の歴史を学び、平和で持続可能な地球社会を建設するために、何をすべきか、何をすべきでないかを考える機会を提供する。

## 3、キャンプ活動の実施経過(実施体制、参加者など)

### (ア) 実施体制

主催:阿武川源流ワーク&スタディキャンプ事務局

共催:特定非営利活動法人日本国際ワークキャンプセンター(NICE)

後援:萩市教育委員会、萩市社会福祉協議会

協力・連携:萩市川上・旭総合事務所、山口県立大学、特別養護老人ホームかわかみ苑、  
特定非営利活動法人すぎのこジャンボリー委員会

助成:庭野平和財団

### (イ) 実施期間: 2012年8月10日~20日

### (ウ) 会場: 川上すぎのこ村(旧川上村立野戸呂小学校跡地。山口県萩市川上野戸呂)

### (エ) 参加費: 県外・海外からの参加者及び留学生については無料。県内からの参加者は、1日あたり500円と1食あたり300円を負担。但し、それ相当以上の差し入れなどをいただいた場合は免除する。定期的収入がある方には「個人協賛」をお願いする。

### (オ) 参加者:約30~45名程度

韓国からの参加(全日程):6名、県外からの参加:4名、県内の学生(一部日程):2名、地元からの部分参加:約30名

#### 4、キャンプ日程

2012年8月10日～20日（10泊11日）

8月10日(金)午後、JR山口線篠目駅に出迎え。川上すぎのこ村に移動。

キャンプ説明・メンバー紹介

「野戸呂すぎのこ合唱団」を結成し、「校歌野戸呂校」の練習を始める。

11日(土)

「野戸呂地球窯」命名式

合唱:「野戸呂校校歌」、朗読:「理想の学舎」徳万義正作

地域と地球を考える学習会(公開講座)

(1)「萩焼400年の歴史」

講師:石崎泰之さん(山口県立萩美術館・浦上記念館学芸課長)

(2)「フィリピン・ネグロス島の子どもたちと共に」

講師:丸山武さん(陶芸家)

野戸呂すぎのこ交流会(歓迎夕食会)

趣旨説明、参加者の自己紹介、来賓による歓迎挨拶

旧野戸呂小中学校卒業生交流など

12日(日) 清掃作業と小さな陶芸窯づくり+薪材運び他

13日(月) 清掃作業と小さな陶芸窯づくり+薪材運び他

14日(火) 老人施設「かわかみ苑」にお出かけ異文化交流、後、阿武川温泉に入浴後、旧萩市内観光し、明木地区に移動。夕方より「明木地区ふるさと祭り」参加。戦死者・物故者慰霊行事にも参列。キャンプ参加者が「のど自慢」に出演し、事前に練習した地元小学校の応援歌「いしのこ山」や韓国の童謡を歌う。

15日(水) フリーデー。(山口・萩の観光など)

夜、日韓討論会。司会進行は中国人青年。

16日(木)～18日(土) 清掃作業と小さな陶芸窯づくり+薪材運び他

19日(日) 日本と韓国の料理づくり

野戸呂すぎのこ交流会(謝恩夕食会)

写真パネル展示によるNGO(NPO)活動紹介及びゲスト紹介

異文化体験報告、来賓挨拶など

20日(月) 朝食後、後片付け・帰国準備。JR山口線篠目駅前に移動し解散式。見送り。

#### 5、キャンプ活動の成果

キャンプでは、103年の歴史を持ち34年前に廃校となった小学校の再生・活用するために参加者が汗を流した。また、小さな窯ではあるが日本・韓国・中国の若者が協力して陶芸体験が可能な窯を製作し、「野戸呂地球窯」と命名した。更には、参加者相互の異文化交流のみならず、地域のお祭りや老人施設に出かけての交流活動も行い、異世代交流の場にもなった。

8月15日の夜には中国人青年が司会進行役を務め、日韓の若者たちがそれぞれの歴史教育を振り返りながら議論するという自主企画が生まれたことは、このキャンプを開催した大きな意義があったと考えている。「源流域に立って日本の現実と日韓の歴史を学び、平和で持続可能な地球社会を建設するために、何をすべきか、何をすべきでないかを考える機会を提供する」という今回のキャンプの目的は達せられたといえるが、このような場づくりを繰り返すことがなにより重要である。

## 6、今後の取り組みと課題

第5回(2014年新春)、第6回(2014年3月)、第7回(2014年8月)の「阿武川源流ワーク&スタディキャンプ」を既に開催し、第8回を2015年新春に予定している。

また、2013年9月23～24日に「第1回 野戸呂の森・里山アートワークキャンプ」を開催し、来る11月23～24日には「第2回 野戸呂の森・里山アートワークキャンプ」を予定している。この時に「野戸呂地球窯」の安全祈願と火入れ式を行う予定。今後はキャンプ参加者や卒業生らが持ち寄った小石と野戸呂の土を混ぜて記念プレートを製作し、その都度、窯で焼いて「野戸呂校 開校150年記念碑」(仮称)に貼り付け、開校150年にあたる12年後の2025年に完成させる予定。卒業生と廃校後のキャンプ参加者らによる共同12年プロジェクトを2013年秋から始める。課題は多々あろうが、課題を乗り越える過程を通じて、国籍や世代を超えた連帯感を育んでいきたい。